

2、真昼の訪問者

蒸し暑い夜のことだった。

普通なら暑さにいらいらするのだが慎吾は違った。

この暑さなら、例の家はきつと窓を開けているはず。

慎吾は鞆に忍ばせたカメラを確かめる。安い給料から諭吉数人を移籍させて購入したのだ。絶好のチャンスとばかりに気合を入れてバイクに跨った。

今日のルートは変則型。一旦藤崎家に行き、そこから一周してまた戻る予定だ……。

十

急ぎ、藤崎家に着いた慎吾は周囲を見る。少し離れた暗がりにはバイクを置き、地図と新聞一部を片手に歩く。もし誰かに見つかっても一応の言い訳が通るようにカモフラージュしたつもりだ。

時間は午前二時。藤崎家の電気は消えている。年頃の娘が居る家なのだから自然な就寝時間だろう。

慎吾はゆっくりと庭に回ると、例の窓を見る。

「……よし」

思った通り、窓が開いていて、内側が覗ける。慎吾は内心ほくそえみ、カメラを起動する。低い起動音の後、液晶にナイトリーダーと出る。この状態だと暗がりでも撮影ができる。

慎吾はカメラを覗きながらゆっくりと窓へと近づく。

「……………んふう……………」

寝息がする。今度は驚かされない。きつと寝ている。実際に寝ていた。

今日もこちらにお尻を向けている。ホットパンツだ。丸くて大きなお尻にはきついのではないだろうか？ 今すぐ部屋に入ってゆったりさせてやりたい。

カメラには女のお尻がかかるように映る。思った程精度は高くないようだ。自分的には高額な買い物のつもりだが、世間的には安物でしかない。それでもリアルな女を盗撮している異常な状況に興奮させられ、チンポはギンギンだった。

「くそ……………」

もうここでオナニーをしたい。そんな欲求に囚われる。

「ふう……………んっ……………」

今日は寝言が多い。なぜだろう。寝苦しいのかもしれない。

お尻を向けたままの女をカメラに捉えながら手をチンポに伸ばす。触るとやはり気持ちが良い。女の声は録音できただろうか？ 今の寝言一つで十分なオカズになったはずだ。

「んっ……………くふうん……………ふうん……………」

先ほどからやたらと寝言を連発させる。もしかしたら起きているのだろうか？ わからな

い。だが、これはチャンスだ。もっと近くで音を拾おう。オカズの山……、バイキング状態だ。今日はもう干からびるまで抜いてやる。どうせ一回射精したらすぐ醒めるが、一時間ごとに抜いてやる。そう誓い、ゆつくりと歩く。

「はああん……んっ……くうふうん……あっ、あっ……ああん……」

「？」

「はあ、はあはあ、あ、あ、あ………！ あっ……」

歩み寄ると声がどんどん大きくなる。輪郭がはっきりしだすと、それは前後に動いているのがわかる。

「……え？」

思わず声が出る。

寝そべった女の右手が股間に見えた。どうしてそんな場所に手が？ 身体を抱くにしてもこんな蒸し暑い日にすることだろうか？ きっとその動作は……。

「んっ、んっ、んっ！ ああん！ くふうん……はあん、きもちいい……」

はつきり聞こえた。キモチイイと言った。この女は今、オナニーをしているのだ。

「……」

チンポがぐんと固くなる。目の前でオナニーをしている女が居るのだ。窓を開けていっただれに聞こえるかわからないというのにオナニーに耽っている。

夜、旦那も居らず一人で身体を慰める人妻。もうそこそこの年頃の娘が居るというのに恥ずかしげもなくオナニー三昧。それとも娘に気を遣ってこの時間にオナニーをしていたのか？ それなら昼にでもすればいいだろう。どうせ暇なのだから。

「ごく……」

内心、女をバカにしつつも目は皿のようにひんむき女を見る。盗撮などどうでもいい。今この女の吐息、仕草、身体を慰める惨めな姿を目に焼き付けたい。この女の痴態を見てやる……！ そう心で吠えた。

「んふうん……ああん、だめえ………え？」

「………」

女は身悶えながら寝返りをうった。同時に慎吾の姿に気付く。突然のことに身体を起こし、はだけた胸元を慌てて隠す。

「あ……」

慎吾は気付かれたことに慌てる。同時に女の手からこぼれる乳首を見る。

ツンと澄ました態度で勃起していた。形は洋ナシを連想させる乳房。経産婦だから当然だろう。けれど、まだまだボリ ユームがあり、柔らかさが見た目で想像できる。

「だ、だれ……」

女は小さな声で尋ねてきた。悲鳴を上げられなかったのは運が良かった。娘を気遣ったせいだろうか？ それともオナニー中であつたことで気が動転しているのか？

「あ、あの、新聞を……届けに来ました……」

慎吾も動転しており、冷静を装おうと近づくと網戸を開けて新聞を入れる。



「あ、どうも……」

女も新聞を受け取るとぺこりとお辞儀。

「失礼します」

「はい、ご苦勞様……」

心臓がどぎまぎしていた。今にも爆発しそうなほどだ。兎に角ここを去る。何も問題は無い。ただ新聞を届けに来ただけだ。庭に回ったのは声が聞こえたから泥棒がいるのかと思いがオナニーを覗き見してチンポを握りましたが射精していませんと言おう。いや、言えるわけがない。なにを考えているのだろう。考えがまとまらない。

慎吾はバイクが見えたところで走り出す。途中転び、エンジンを掛けようと何度もキックする。ニュートラルでアクセル回して大音量。慌ててギアを入れ、がっこんがっこん前後に揺れる。

「なにやってんだ、俺……仕事しろ」

焦り何が無駄かわからずひとまずエンジンを切る。そして一呼吸。藤崎家の明かりがついたところでようやく我に返る。

とんでもないことをしてしまった。どうしよう。どうすべきだ？ 答えは一つ。新聞を配る。それが仕事だ………………。

その日の配達が終わったのは太陽が昇りかけてからだった。

営業所に戻ると伸介が電話に対応しており、慎吾の姿を見るとジロリと睨む。その間も見えない相手にペコペコ頭を下げているのが滑稽だった。

「……………」

慎吾はバイクの鍵を掛け、ヘルメットも外さずにじっとしていた。

「…………ふう、つたく、たかが新聞ぐらい読まなくたって死なねーっての……。お、なんだ？ まだ居たのか？」

「え、あ、はい……。その、遅れてしまって、その……」

「あんまり時間かけるなよ。ガソリンだったただじゃないんだぞ」

「あの、その……。なんか苦情とか……」

「？ そんなのお前が気にすることじゃねーだろ。終わったらさっさと帰れ」

「あ、え、あ、はい……」

きつと苦情が来るはず。庭先から家の中を覗いていたのだ。

いくら窓を開けていたとはいえ、覗きをしてよいわけがない。新聞配達員による盗難・覗き事件はこの村のような狭く人口の少ない場所だからこそ聞かないが、ニュース番組では時折忘れたころに報道される。

慎吾がしてしまったことも通報案件であり、本来なら即通報され警察の事情聴取……。

どのように捜査が進むのかは知らないけれど、朝刊を配ったのだから配達員が自分であることもすぐに辿りつく。当然、まずは営業所に連絡が来て、そこから……。

だが、営業所に警察は来ていない。配達中もパトカーを見ていない。つまり、通報はされていない。

ひとまずはほっとするが、いつ通報されるかわからない。時間を置いて冷静になれば対応の順序・手段が見えてくる。となれば、明日の今頃にはもう手にお縄が……。

「……………」

「どうしたんだ？ 変な顔して……」

瞬きもできずに立ち尽くす慎吾を見て伸介が怪訝そうに声をかける。彼は別の仕事があるらしく、それほど気にせずに荷物を移動させていた。

「帰ります。お世話になりました……」

「おう、おつかれ」

これが今生の別れになる。そう思い、自然と口にしていた……。

家に帰った慎吾はふとんにくるまり、頭を抱えていた。

いつ警察が来るのだろう。居留守など通用しないだろう。どうせ鍵などあつてないようなものだ。蹴破ろうと思えばいくらでもできる。

何か言い訳をしたら……。何も思いつかない。何も自分を弁護できるようなモノが無い。いや、むしろ自分を追いつめるモノがある。

「……………」

昨日染しんだ布を思い出す。精子塗れにしてしまったそれは洗って干していた。今からでも処分しなければならない。どこかに捨てるか？ 焼却処分の方がいいか？ どこで？ どこで……。どこで何をして誰かに見られる気がする。だが、何もしないわけにもいかない。

慎吾は立ち上がり、赤い布地を手にする。

洗ったものの、染みができている。精子のせいだ。きつと自分の体液がこびりついている。

これは焼却するしかない。だが、タバコを吸わない慎吾の家にライターやマッチは無い。ならばとコンロを見る。火をつけようにも電池がなくなりかけているのか、火の着きが悪い。

「くそ、つけ！ つけ！」

慌てる慎吾だがガスの元栓を閉めていたようだ。慌てて気付いてガスを出す。すると今度はしゅーと勢いよく吹きだす。

「わわ……………」

このまま火を付けたら爆発しかねないと換気扇に手を伸ばし止める。窓を開けて換気しようとして窓に走った。

「……………」

「……………」

窓を開けた先に人が居た。涼しそうな水色のワンピース。目鼻顔立ちの整った色白の女性。額に汗滲ませて手には回覧板を持っている。

もしモデルと言われても頷けるだろう。スタイルもよく、顔も皺ひとつない。村で有名な美人と言われても頷ける。ママドルという言葉が最近あるようだが、彼女なら普通のグラドルと言われてもおかしくない。まるで掃き溜めに鶴。こんな村に似つかわしくない美人。藤崎ひろ子本人だった。

今一番会いたくない人がどうしてここに居るのだろうか？ 回覧板のせいだ。村の出来事など興味などないし、知らせなくても良い。どうせどこの婆さんが死んだの爺さんが帰ってこないかなんだ。そんなもののセルフ村八分の慎吾には不要なこと。なのにどうして田舎というものは繋がりをもちたがるのか？ 一度もつながったことも無いのに。

「あの……、貴方、新聞配達の……方？ ですよね」

「あ、いえ、違います……僕は……………」

「昨日、鍵を落しませんでした？ 庭に落ちていたんですけど……………」

「いえ、落していません。知りません。人違いです」

ひろ子が鍵を見せようと取り出すので慎吾は窓をピシヤリとしめる。

「……………」あの、ちょっと……………」ええと、武山さん……………」少しお話をしましょうよ。ね？」

「……………」

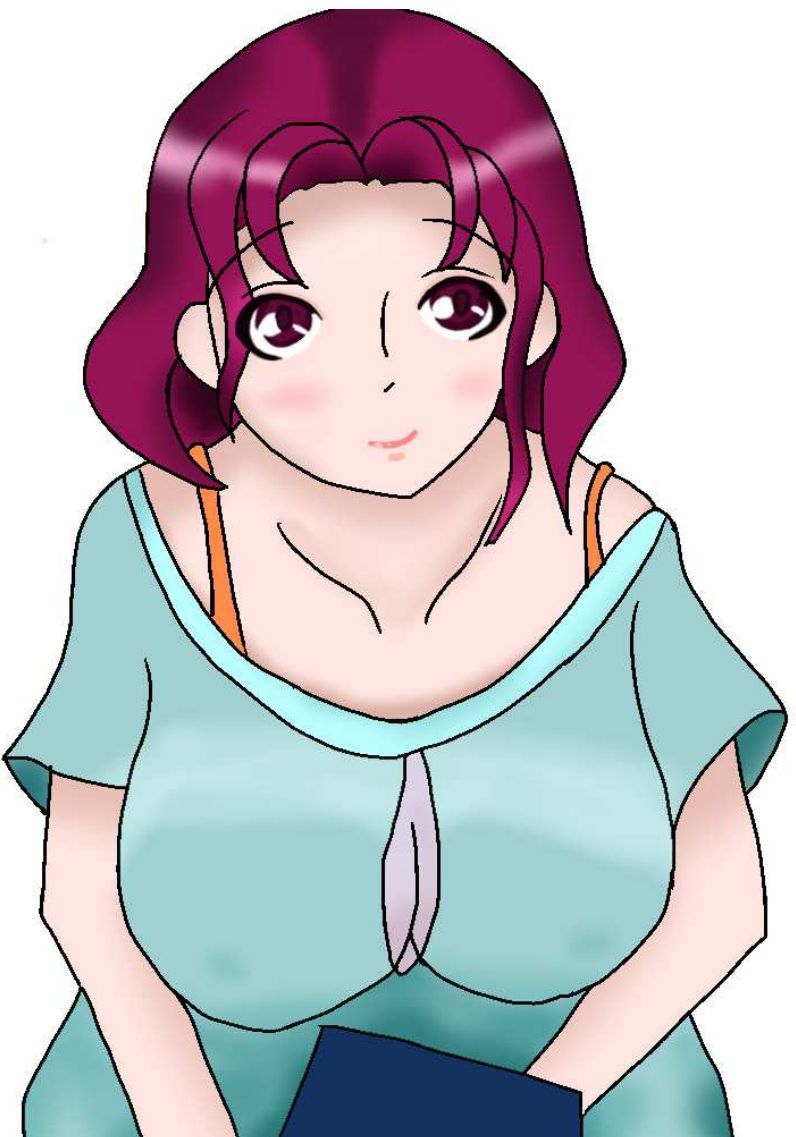
玄関がノックされる。やはりだ。やはりひろ子に気付かれたのだ。
狭い村だからだろうか、誰が新聞配達をしているのかなど共有されている。個人情報保護
という意識は一切無いのだ。

「あの、武山さん？」

居留守は無理だ。今顔を合わせたばかりだ。では、どうすればいいのか？ というか、どうして警察に言わないのだ？ それともまさか自分を強請るつもり……。そんなはずはない。自分のような貧乏人に強請るなど……。いや、何も金だけが強請る理由ではないだろう。他にもいくらでもある。何か汚いコトをさせるとか？ 例えば保険金殺人。旦那に保険金をかけて殺す。よくありそうな話だ。きつとお話というのはそのことだろう。なんて女だ。極悪人、守銭奴、金の亡者、人殺し、保険金詐欺のカマキリ女……。まさか村で有名な人妻の裏の顔はそんなものだったとは……。

「……藤崎さん、保険金詐欺なんてだめです！ 犯罪ですよ！ 貴女は自分のしようにしていることがわかってるんですか！？」

「え？ あ、あの、一体なにを……。おっしゃっているんですか？ あの、武山さん……」
「僕はそんなことに手は貸せない！ 人殺しなんて！」



「あの、話が見えないのですが……？　ひとまず落ち着いてください。私がお話をしたいのはそういうことなく、昨日のことです……」

「やっぱり！　そのことで僕を強請って保険金殺人をするつもりなんですね！」
ドアを開けるとひろ子は一瞬目を丸くしていた。そして笑っていた……。